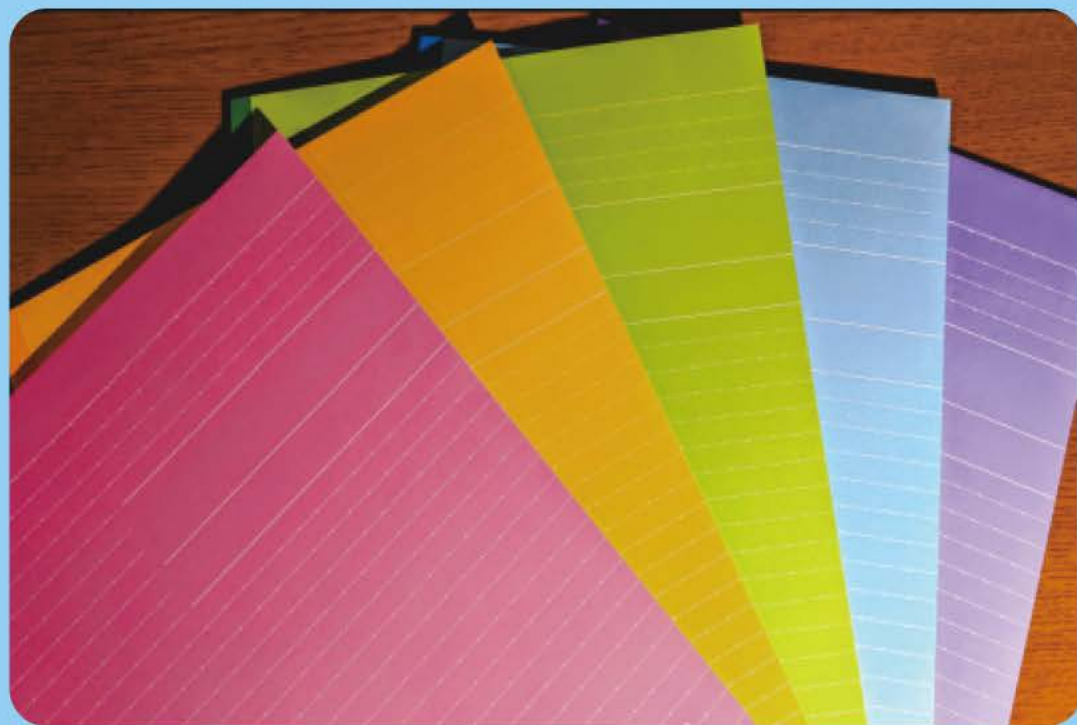


# ACTIVE LEARNING REPORT

2021



茨城キリスト教大学

文学部文化交流学科

アクティブ・ラーニング報告書

## 巻頭のことば

2022年は北京冬期オリンピックで始まりました。様々な選手の活躍の中、米国出身で中国籍の谷愛凌（アイリーン・グ）選手（18歳）は、三つのメダルを獲得した後、なぜ生まれ育った米国でなく、中国を選んだのかを記者から問われた時、「枠にはまる必要はない」と答えたそうです（朝日新聞2022年2月19日朝刊1面より）。世界が米中対立で不穏なムードが漂う中、若い人たちの中にこうした考えが広がっているとしたら、嬉しいことです。

この「枠にはまらない」という発想こそ、文化交流学科の「多文化協働」において最も重要な精神だと私は思います。



文化交流学科では、2021年から新カリキュラムがスタートし、そのテーマである「多文化協働」の一環として、外国人児童に対する日本語教育支援などが始まりました。今年の2022年からは、その中心的な授業として「多文化協働演習」も始まり、本格的に新カリキュラムが始動しました。

2021年度は、前年度と同様、コロナ禍が続く中で厳しい1年でしたが、学生と留学生、そして教員は、規制のある中、アクティブに動き回ったと思います。その成果・精華が、この報告書にあふれていますので、ここから様々な「枠」を超えようとする試みを学んで欲しいと思います。



文化交流学科主任  
染谷 智幸  
2022年2月

# 目次

巻頭のことば（文化交流学科主任 染谷 智幸）

I	外国人教育支援の取り組み―「特殊講義」・「特別演習」	・ ・ ・ ・ ・ 1
II	多文化協働、1年目のチャレンジャー「多文化協働演習」	・ ・ ・ ・ ・ 7
III	祭りの現場へ―「地域貢献演習Ⅰ・Ⅱ」	・ ・ ・ ・ ・ 11
IV	情報発信のコラボレーション―「情報デザイン演習」	・ ・ ・ ・ ・ 25
	< 講演会 >	
	SDGs時代の地域環境を考える	・ ・ ・ ・ ・ 31
	< Faculty Development >	
	2021年度文化交流学科FD報告	・ ・ ・ ・ ・ 35

I 外国人教育支援の取り組み  
— 「特殊講義」・「特別演習」

## 外国人教育支援の取り組み—「特殊講義」「特別演習」

宮崎 晶子

### はじめに

本講義は、2021年カリキュラム「外国人教育支援演習」に連動して「特殊講義」「特別演習」として開講されている。「多文化協働」という学びの柱の中に設定され、履修生は留学生と協働しながら外国人児童、高校の留学生に対して日本語支援を実施している。

### 今年度の履修生

3年生：6名（全員文化交流学科）

4年生：8名（文化交流学科7名、児童教育学科1名）

交換留学生：1名（キルギス、JLPT2級）※オンラインで在宅受講



3年生



4年生（1名研修により欠席）

### 主な支援先

- ・ 日立市内の外国人児童（対面、Teams）
  - ・ 文科省「アジア高校生架け橋プロジェクト」留学生（ICH 1名、日立一高1名、対面）
  - ・ ICH受け入れ予定の留学生（1名、コロナ禍で入国できずZoomにて支援）
- ※そのほか、ボランティアで筑波大・県教委「グローバル・サポート事業」に参加させていただいた。

### 今年度の目標

学生たちの話し合いの中から、以下のような意見が出された。

#### ～外国人児童への支援：

「日本を好きになってもらえるような支援がしたい」「様々な場面で、友達と上手にコミュニケーションをとれるようになってほしい」「安心できる、落ち着ける居場所を作れたら」「間違えても大丈夫な雰囲気づくりがしたい」「学校の授業が分かるように、ひらがな、カタカナ、時計の読み方、3桁の計算は習得させたい」

～ ICH・日立一高留学生への支援：

「日本の生活で必要になるサバイバル日本語の習得」「学校生活で必要になる教科名や文房具の名前などは一通り教えたい」「希望する進路を聞いて、必要になる日本語力を身につけてあげたい」



※外国人児童の日本語教育支援の様子は、茨城新聞（2022年1月12日付）で紹介された。

### オンラインでの日本語支援の様子

本学の交換留学生（キルギス）が日本に入国できなかったため、児童への支援をオンラインで実施した。初回は児童が緊張し、なかなか会話できなかったが、留学生が「おとぼけ役」となって児童に教えてもらう様子が見られた。Teams の Whiteboard を使ってクイズを出し合い、ひらがなカタカナの読み書きや発話の確認ができた。



### 準備の様子

児童に楽しんでもらえるような教具づくりを心掛けた。ひらがな・カタカナの読み書き、助数詞、助詞などがフォローできるような内容になるよう工夫した。オンラインで支援をする本学の交換留学生と Teams で相談しあいながら支援の流れを組み立てていった。対面とオンラインのハイブリットでの支援となり、準備した内容が実施できないこともあった。



## 高大連携にむけて — 「アジア高校生架け橋プロジェクト」 留学生への日本語支援 —

今年度は、文部科学省補助事業「アジア高校生架け橋プロジェクト」で留学している高校生2名に対して日本語支援を行った。当該プロジェクトは今年度で4期目を迎え、茨城県全体では4校の高校が6名の留学生を受け入れた。

県北では日立一高、ICHがそれぞれ1名ずつ留学生を受け入れた。留学生の日本語レベルはまちまちで、高校の授業をそのまま受講するのはハードルが高い。また、今年度はコロナ禍でほとんどの留学生が入国できなかったため、留学生同士がつながることも難しい状況であった。

留学生2名は本学で会ってすぐにうちとけ、外国での生活についておしゃべりしながら相談し合い、支え合っている様子が見受けられた。支援を行う本学学生からは「せっかく日本に来られたんだからいろいろ経験させてあげたい」といった意見が聞かれ、支援の内容についても学生同士熱心に話し合う様子が見られた。

今後も高大連携プロジェクトとして、県北に留学する高校生たちの日本語支援を持続可能な形で進めていきたい。





## 筑波大学と県教委が実施する日本語支援に参加

今年度は履修生のうち2名が、筑波大学と県教委の「グローバル・サポート事業（オンライン学習による日本語初期指導カリキュラム開発・検証に関する研究）」に参加した。事前に筑波大学が実施する研修を受け、研修後は県南・県西の外国人児童・生徒へのオンラインによる日本語支援を実施した。

参加した学生からは「めっちゃ勉強になる。」「筑波大のレベルについていくのに必死すぎる。」「たまに頭がショートする。」などの感想が聞かれた。

前述した茨城新聞の記事にあるように、日本語支援の必要な児童・生徒のうち担当教員から日本語の指導を受けられる児童・生徒の割合は、本学が位置する県北と県南・県西では格差がある。外国人児童が散在する県北では全容を把握しにくいいため、今後も筑波大学と情報共有していきたい。



研修の中で模擬授業をしている様子。  
「友達にサッカーしよう、と言ってみる」

## 2年目を終えて

本講義は今年度で2年目となる。昨年度の4・5月はコロナ禍で小学校が休校となり、留学生もまばらな状態で始まった。今年度は、社会全体がコロナ対応にも慣れた中で、教育現場における課題が浮き彫りとなった。

大変ありがたいことに、この授業に関して学外の反応は温かく、筑波大の先生方はじめ多くの皆様の活動に励まされ、多岐にわたる業務に向き合ってきた。

来年度からは、本学のプロジェクトの一部としての在り方を教員同士で話し合っていきたい。

## II 多文化協働、1年目のチャレンジ —「多文化協働演習」

## 新しく始まった多文化協働演習の授業、1年目のチャレンジを報告します

宮崎晶子・染谷智幸

文化交流学科では、2021年より新カリキュラムが始まりました。その目玉の一つは、多文化協働と銘打った授業群です。様々な新しい授業が行われますが、その中でもこの「多文化協働演習」はその多文化協働カリキュラムの中心的存在として光ります。

その1年目は、日立の地元の小学生に、外国旅行に行き、多文化に触れることを疑似体験してもらおうという大胆な企画です。本当にそんなことできるの？と思うかも知れませんが、出来るんですね、これが。

今回は、小学校の体育館をお借りして、その中を半分に区切り、そこに国境・エミグレーション（出国管理）を作りました。小学生の皆さんは、学生手作りのパスポートにスタンプをもらって出国、そこから好きな国に行けます。その国に入る時もイミグレーション（入国管理）があってスタンプを押して中に入ります。そして、そこには留学生が待ち構えていて、生徒の皆さんを異次元空間にお招きをする、そんな具合です。

ただ、残念だったのは、今回はコロナ禍で留学生が日本にほとんど来られませんでした。そこで、オンラインで参加してもらって、国の特色や美味しい食べ物などを小学生に紹介してもらいました。

今年度にこの多文化協働授業を行った小学校は、地元の大みか小学校（2022年11月17日実施）と、塙山小学校（2022年12月3日実施）です。ここでは、大みか小学校の例をご紹介します。（なお、以下の文章や写真は、茨城キリスト教学園の法人事務局・学園広報担当の新妻幹生（にいづま・もとみ）さんが学園のHPに掲示してくださったものです。それを抜粋してここに載せました。新妻さん、ありがとうございました。）

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

文化交流学科：大みか小学校へ訪問し

海外文化紹介の授業を実施しました

11月17日（水）に、本学学生（「多文化協働演習」履修者）が、大みか小学校を訪問し海外文化紹介の授業を実施しました。

大みか小学校6年生の児童が参加し、本学の大学生および留学生とICHの留学生が母国であるインドネシア、キルギス、ドイツ、フィリピン、ベトナムの文化や伝統について紹介しました。

新型コロナウイルス感染症の影響により日本へ入国できない留学生は、Microsoft Teams を使ってオンラインで海外から自国の文化や伝統について紹介してくれました。

## IC パスポートを持って海外へ出国です！

① IC パスポートは今回の授業のために本学の学生(C科の鈴木花乃音さん)がデザインしたものです。児童は IC パスポートを持って興味のあるブースに向かいます。

② 各国に入国する際には、入国スタンプを押してもらい、

③ 10 分程度の文化紹介を聞きます。

①



②



③



## ここからは各国の文化紹介風景です！



ドイツへの留学経験の話



キルギスの留学生の話



フィリピン・タガログ語の紹介



ベトナムの食文化

★今回、多くの留学生は参加できなかったのですが、茨城キリスト教学園高校にフィリピンから来た留学生（↑上の「タガログ語」の写真・左側に写っています）が特別参加してくださいました。



インドネシア紹介

### Ⅲ 祭りの現場へ

#### 一 「地域貢献演習Ⅰ・Ⅱ」

## 2021 年度「地域貢献演習Ⅰ・Ⅱ」の学外演習について

清水 博之

### はじめに

本稿は、2021 年度から開講した「地域貢献演習Ⅰ・Ⅱ」の学外演習について報告するものである。本学の文学部文化交流学科では、従来から学びの 4 本柱として、「国際共生」「地域貢献」「観光」「日本語教育」を掲げてきた。

2021 年度から始まる新カリキュラムを編成するにあたり、文化交流学科における「文化を学ぶ」ための 2 つの視点（グローバルとローカル）を基軸として、この学びの 4 本柱の見直し作業が進められた。その中で「国際共生」は、来日して在留する外国人の現代的な課題に実践的に対応する「多文化協働」へと改編することになった。「地域貢献」についても、その内容をより進展させるために、少子高齢化や住民意識の多様化の中で、それぞれの地域が自らの文化や伝統に誇りを持って存続できるようにするための方策を実践的に学修できるようにした。そのために従来からの「ひたち学」と「地域貢献研究」に加えて「地域貢献演習」をあらたに開講することになった。この授業は、アクションプラン「日立風流物後継者育成事業」とも連動しており、当地方の伝統的な文化資源であるユネスコ無形文化遺産「日立風流物」を素材として取り上げて、他地域の同様な事例と比較検討することにより、あらためて自分が居住する地域の文化を再確認・再発見しようとするものである。あわせて学生自らもその伝統文化の担い手の役割を体験することで、学生が将来ふるさと思う地域へどのように貢献していくべきなのかという命題を考察する機会にしようとするものである。

### 1 履修生について

2021 年度から始まる新カリキュラムであることから履修可能な学年は 1 年生だけであった。履修生が 1 年間を通して各地の「祭り・行事」を見学し、翌年 4 月に開催される日立さくらまつりにおける日立風流物の公開事業に参加する際には、その本質的な意義を理解できているようにするため、基本的に地域貢献演習Ⅰ（前期）と地域貢献演習Ⅱ（後期）を継続して履修するように勧めた。その結果 18 名が前期・後期ともに履修することになった。

### 2 授業の概要

本学における地域貢献の目的は、たんに地域を支援することばかりではなく、地域を自らの存する場所として慈しみより良くしようとする人を育てることにある。この演習では、自分のふるさとと他所の文化を比較検討することによって、自らの文化をより明確に理解できるようになることをめざした。そのために、ユネスコ無形文化遺産「山・鉾・屋台行事」をキーワードとして、各地でこれを継承している人たちと交流し、その心意を探求した。

前期には、「常陸大津の御船祭（北茨城市）」や「京都祇園祭の山鉾行事（京都市）」（注：コロナ

禍により中止)、後期には「日立風流物(日立市)」や「秩父祭の屋台行事(秩父市)」などを見学・体験した。演習の最後には、毎年4月に公開される日立風流物の公開に参加して、地域貢献の基本的な学修を完了する。なお、本演習は、前期と後期を継続して履修することでより深く理解できるようになる。そのために、この演習と連携した授業である「ひたち学」や「地域貢献研究」も、あわせて受講することを勧めた。

### 3 授業計画

#### (1) 地域貢献演習Ⅰ(前期)

第1回	オリエンテーション
第2回	ユネスコの理念と地域貢献
第3回	事前学修:常陸大津の御船祭
第4回~第5回	現地演習:常陸大津の御船祭(北茨城市)日帰り
第6回	事前学修:京都祇園祭の成り立ち
第7回	事前学修:京都祇園祭の山鉾行事
第8回	事前学修:京都祇園祭と大学の地域貢献
第9回~第14回	7/16~18(2泊3日) 現地演習:京都祇園祭の山鉾行事(京都市) ※コロナ禍のために中止
第15回	事後学修/まとめ

#### (2) 地域貢献演習Ⅱ(後期)

第1回	オリエンテーション
第2回	ユネスコの理念と地域貢献
第3回	事前学修:日立風流物を継承する人たち
第4回~第5回	現地演習:日立風流物(日立市内)日帰り
第6回	事前学修:秩父祭の成り立ち
第7回	事前学修:秩父祭の屋台と笠鉾
第8回	事前学修:秩父祭を継承する人たち
第9回~第14回	12/2~4(2泊3日) 現地演習:秩父祭の屋台行事と神楽(埼玉県秩父市)
第15回	事後学修/まとめ

### 4 コロナ禍による授業計画の変更

#### (1) 地域貢献演習Ⅰ(前期)

現地演習を予定していた「京都祇園祭の山鉾巡行」が中止となったため、行先を鹿嶋市と香取市へ変更し、7月17日から18日までの1泊2日で実施するべく準備を進めた。ここでは12年毎に執り行われる「御船祭」の現地を鹿島神宮と香取神宮でたずねるとともに、香取市では山車会館で「佐原の大祭」を学修し、あわせてNPO法人「小野川と佐原の町並みを考える会」理事長の講話を受講する予定であった。しかし、コロナ禍の進展によってこれも中止せざるを得ないこととなった。そして、この代替措置として8月9日に現地演習「日立風流物の継承地をたずねて」を計画したが、7月27日に茨城県版コロナ Next stage が stage3 に引き上げられ、7月30日からは16市町が「感染拡大市町村」に指定されたことにより再度の中止となった。

#### (2) 地域貢献演習Ⅱ(後期)

現地演習を予定していた「秩父祭の屋台行事と神楽(埼玉県秩父市)」については、やはりコロナ禍により屋台・笠鉾の曳き回しが中止となった。しかし、秩父市教育委員会に打診したところ、



御神幸祭は規模を縮小するが実施するとのことであった。御神馬供奉も予定通りに実施し、上町町会だけが収蔵庫前で屋台の飾り置きするということがあった。そこで、2泊3日の行程を1泊2日（12/3～4）に短縮して実施することにした。

## 5 現地演習のメリット

毎年、同じ時期に同じ場所で執り行われる「祭り・行事」であっても、現地ではその都度、天気も気温もそして吹く風も違うように、それを担う人たちも観る人たちも少しずつ違っているものである。また、それらの人たちの心持ちも少しずつ違っているかもしれない。毎年、同じ祭りを観察調査していると、そのたびに違った感情を覚える。幾度も行って観察していてもあらたな発見をするときもある。机上の書物で理解したつもりでも、現地へ行き人々の心情に直接触れたときに感じる直截的な理解に勝るものはない。

## 6 現地演習の留意点

現地演習は、教員に連れられて行く遠足とは違う。自ら学ぼうという強い意志をもって取り組まなければ得るものは少ない。自主的に学修する意欲を促すためにも、この演習では基本的に現地集合、現地解散としている。自分の住んでいる場所から集合場所までの経路、そして解散場所から帰る経路は自由である。しかし、自分だけで往復することが不安という学生もいる。そこで、教員の使う列車（号車番号も）や経路を予定表に明記しておき、できるだけ一緒に行動できるように配慮した。

また、現地演習に先んじて事前学修を実施した。ここでは対象となる「祭り・行事」の概要や歴史などについて映像を交えて解説して理解できるようにした。現地演習後にはレポートを課した。提出されたレポートはすべてIC-UNIPA（学内web）に掲出し、全員が閲覧した上でそれらのレポートに対する意見や質問、あるいは所感を考察しておくように指示した。事後学修では、各人が自らのレポートに基づいた発表をして、ディスカッションを実施した。

## 7 事例報告

### (1) 日立風流物の継承地をたずねて（日立市宮田町ほか）

- ① 実施日 2021年10月30日（土）
- ② 現地演習先 日立駅・展望イベントホール（浜の宮・虎磯・神峰公園・神峰山を遠望）  
日立駅・情報交流プラザ（日立風流物に関するお土産）  
吉田正音楽記念館・5階展望台（神峰山頂などを遠望）  
神峰公園内（天道塚跡・根本甲子男氏顕彰碑・神峰神社・日立風流物収蔵庫など）  
おまつりロード（大祭礼で日立風流物を公開する場所）  
日立シビックセンター・新都市広場（2分の1模型・公開時の留め具）
- ③ 日程表 資料①
- ④ 履修生レポート 資料②

### (2) 秩父夜祭（埼玉県秩父市）

- ① 実施日 2021年12月3日（金）～4日（土）
- ② 現地演習先 上町屋台収蔵庫（屋台と囃子の現地見学）  
上町ギャラリー（教育委員会・保存会との交流）  
秩父神社（御神幸行列）  
秩父まつり会館（山・鉾・屋台保存連合会役員からの講話）

③ 日程表

資料③

④ 履修生レポート

資料④

## 8 さいごに

「地域貢献演習」は、2021年度から始まる新カリキュラムということもあり、履修生は1年生だけであった。そのためにまずは大学生のレポートの書き方から取り組むことにした。オリジナルの資料を作成して、高校までの調べ学習だけではなく、テーマの設定、調査方法、レポートの書式、引用のしかた、注や参考文献の書き方などを学修した。

アクティブ・ラーニングについては、現地での履修生の様子やレポートの内容、そして事後学修における活発なディスカッションによって、十分な効果を挙げていることがわかった。今後は、県北地方についての知識や文化遺産を継承する意義を学修することができる「ひたち学」や「地域貢献研究」とより密接な連携を推進することによって、どこであっても自分が生活する地域に対して真摯に向き合うことができる姿勢を涵養したい。

資料①

### 地域貢献演習Ⅱ「現地演習」 日立風流物の継承地をたずねて 日程(案)

実施日：2021年10月30日(土)  
対象地：日立市富田町ほか

2021.10.28.(金)初日版

時刻	種別	実施内容	所要時間	場所	内容	備考
11:01	乗			日立駅	JR常磐線 下り 普通 水戸駅→高萩行	(参考)
11:02	乗			日立駅	JR常磐線 上り 普通 いわき駅→水戸行	(参考)
11:10	集合			日立駅・展望イベントホール	決まりの場所を過ぎます (富田町→茨の宮、花崎、神峰公園、神峰山、etc)	茨の宮を出て寄り道りを右側へ進んで下さい
	徒歩		0:20	(日立駅・情報交流プラザ)	日立風流物5分の1概要や日立風流物に関連する土産物を調査します。	
11:33	乗			バス停「日立駅中央口」 (1番乗り場から乗車)	63「神峰宮東所」行(日立市役所・レジャーランド・小水駅・マルト津川経由)	
	バス		0:13			運賃190円
11:46	乗			バス停「レジャーランド入口」下車		
	徒歩		0:04			
11:50	乗					
	案内		0:30	吉田正喜歴史遺構(案内見学を含む)	3階展望台から市街地を眺望(神峰山頂・神峰神社本殿、大講堂、太平寺、市街地、神峰公園、etc)	観光地参観を覚悟した旨を正直についても尋ねましょう
12:20	乗					
	徒歩		0:30	神峰公園内(現地説明)	元風流物、根本寺本堂(講堂跡)、小平成平・久原屋土合講堂跡、神峰神社遺構群、日立風流物の継承、etc.	観光で訪れた日立風流物が遺構するきっかけになった公園を現地で確認しましょう
12:50	解散					
			0:00		各自で飲食・休憩した後は、各自で現地帰路	
13:40	集合					
	徒歩		0:24	おまつりロード(現地説明)	神峰神社大祭礼のときに日立風流物が公開される会場です	
14:04	乗			神峰公園のバス停	83 84「日立駅中央口」行き	
	バス		0:01			運賃190円
14:13	乗			バス停「日立駅中央口」		
	徒歩		0:00	日立シティセンター・駅前駅舎	日立風流物の本拠を把握して観光客向けに活用する本拠、日立風流物5分の1概要、etc.	
14:33	解散			日立シビックセンター		
15:02	乗			日立駅	JR常磐線 下り 普通 水戸駅→いわき行	(参考)
14:47	乗			日立駅	JR常磐線 上り 普通 いわき駅→水戸行	(参考)

## コロナ禍からの祭の復興 ～祭と地域住民の相互関係～

文学部文化交流学科 1年

2114023 佐川 仁美

### [目次]

- 1 序論
- 2 本論
  - (1) 他地域における東日本大震災からの祭の復興
  - (2) 日立市における復興
  - (3) 2地域の比較
- 3 結論
- 参考文献

キーワード：日立風流物、根本甲子男、復興、愛着、向上心、団結力

### 1 序論

日立風流物は第二次世界大戦により、今後の存続に関わる甚大な被害を受けた。しかし、その被害の中、根本甲子男という人物は自分の私財を投げ打ち全国各地から人形の首を集めるなどし、日立風流物を復興へと向かわせた。今回のフィールドワークでも彼の顕彰碑を見学した通り、彼の功績は大きく称えられている。

現在では日立風流物を含め、全国各地の祭が続々中止、延期、または最低限の規模での開催、という状況になっている。祭を行うことができないという状況は理由が違えども、戦時とコロナ禍、どちらも祭の存続に関して危機的状況であり、現在のコロナ禍もかつて第二次世界大戦による被害で祭りが行うことができなかった時期と同じような状況だと言えるだろう。



(根本甲子男の顕彰碑 10月30日 筆者)

では、かつて根本甲子男が第二次世界大戦後に祭を復興へ向かわせたように、現在のコロナ禍での状況から祭を復興させるためにはどのようなことが必要なのか考察していく。もちろん、コロナ感染の拡大が収まることが第一に必要なことだが、コロナ禍により祭が行われなくなり伝承をしていくのが難しい現在から、コロナ禍が終わり祭を行えるようになった後、コロナ禍以前の祭の活気のままコロナ禍後も祭を繋げていくにはどうすればいいのかという点について考察していく。

今回の調査では、祭ができなくなってしまった状況から復興するまでの過程について他の地域も参考にするために、祭の復興についてまとめられている論文を参考に調査を進めた。

## 2 本論

### (1) 他地域における東日本大震災からの祭の復興

まず、戦後やコロナ禍と同じく、祭を開催することが難しかった東日本大震災時における祭の復興について、宮城県南三陸町保呂羽神社の春祭りの事例を紹介する。

この保呂羽神社の春祭りをを行う地域では、神輿渡御を行うルートが津波によって甚大な被害を受けた。しかし震災の翌年、2012年には仮設の商店街を通り、神輿渡御が行われた。また、2014年には氏子の住む仮設住宅の前を通り、商店街の各店舗に対してお祓いが行われるなどした。その後、2017、2018年にはさらに盛土や高台の上に商店街や住宅地が移転していくと、祭の参加者や地域の氏子の意思によって神輿渡御のルートは元のルートに加え、移転した商店街や住宅地まで巡るルートになり、元々より長い距離の渡御へと変わっていった。また、この祭の参加者からは昔の祭についての話や、日本一の祭だと自分たちの祭を誇り、愛する声が聞こえたという。この事例からやはり、自分たちの地域、祭を誇り、愛する気持ち、より良いものにしていこう、戻していこうという気持ちの大切さがうかがえる。

### (2) 日立市における復興

次に日立市における復興を見ていく。まず、序論にも述べたように第二次世界大戦による被害で甚大な被害を受けた日立風流物だが、根本甲子男による活躍によって復興が行われた。根本甲子男は全国各地へと赴き私財を投げ打ち200を超える人形の首を集めた。日立風流物を復興させようという熱い気持ちを持っていなければこのような行動は決してできないだろう。また、この戦後には日立風流物の復興だけでなく、市全体としての復興事業も行われていた。それは経済を活性化させるなどのために現在のレジャーランド周辺を開発し、公園や動物園を作ろうというものであった。このプロジェクトのために団体が作られるなど多くの住民が地域を良いものにしようという気持ちで行動していたことが分かる。実際に現在ではレジャーランド周辺には多くの子供連れの家族など、沢山人で賑わっていた。当時のプロジェクトが上手くいったからこそであろう。そして、日立市ではこの他にも様々な困難を乗り越えてきた歴史がある。まず、亜硫酸ガスの被害を乗り越えた。銅を精錬する際に亜硫酸ガスが放出され、山の木が枯れ果ててしまったが、煙を高い地点で拡散させようと、住民と企業が一体となり日立市の象徴ともなるような約150メートルの大煙突を作った。また、亜硫酸ガスで枯れ果てた樹木に代わり、ガスに強い樹木である大島桜を探し出し植林が行われた。それにより、見た目の美しさもあるため大島桜だけでなく、ソメイヨシノなどの桜が町中に植えられた。今では日立市の花は桜とされている。このように日立市では根本甲子男による日立風流物の復興を含め、地域住民が地域をより良いものにしようと協力し合い様々な困難を乗り越え、地域の魅力を増やしていったことが分かる。また、今では日立製作所と日立鉱山のマーク入りの煎餅や、大煙突をモチーフにしたクッキーが販売されている。少なくともこのことから地域の人々が地域の歴史に誇りや愛着を持っていることが分かる。

### (3) 2地域の比較

宮城県南三陸町と日立市を比較すると、どちらも復興に際して、自分の地域や祭を誇る気持ちや愛着があり、より良いものにしていこうとする向上心、多くの地域住民が一体となって物事に

取り組む団結力があつたことが分かる。これにより、愛着、向上心、団結力などの気持ちが祭の復興や、地域をより良いものにしていくためには大事になってくるのだと考えられる。精神論かと言われるかもしれないが、これらの思いがあつてからこそ、地域のために様々な行動が起こせるのだろうから、他の観点から見て他に必要なものがあるとしても、これらの気持ちを持つ地域住民が多ければコロナ禍が終わった後に祭を復活させようという動きがより活発になるのではないだろうか。また、保呂羽神社の春祭りの事例のように日本一の祭であるという話が出るほど誇りに思える祭が出来た時には、逆に、その地域の住民たちは地域に対して愛着が湧き、団結力、地域をより良いものにしていこうという向上心も今までより大きく持つことができるのではないだろうか。そのため、地域住民と祭は相互に関係していると考えられる。

また、亜硫酸ガスの被害を防ぎ、それにより桜の町となった日立のように困難を乗り越え、新しい魅力を生み出し、より良い方向へと向かうことも可能である。そして、困難を地域住民と協力し合い乗り越えていく過程で地域内のより良い関係を築くこともできる。このような考えからコロナ禍という困難を逆手に取り、コロナ禍後の祭や地域をより良いものにしていくことも可能だと考える。

### 3 結論

コロナ禍が終わり祭を行えるようになった後、コロナ禍以前の祭の活気のままコロナ禍後も祭を繋げていくにはどうすればいいのかという点について考察するために論文を参考に2地域の祭の復興を比較し調査した。比較すると、祭の復興や、より良いものにするためには、地域住民の地域に対しての愛着、向上心、団結力が重要になってくることが分かった。これらがコロナ禍後の祭の復興、伝承していく上でも必要になってくると考える。また、祭と地域住民のこれらの精神的な部分は相互に関係しているのだろう。

今回の調査結果では重要となる地域への愛着、向上心、団結力といった精神を身に着ける方法として、困難を乗り越える、誇りに思えるような祭を行う以外の方法で、日常的にどのように身につければいいのか解明できなかった。また、精神論的な結果になってしまったので、それ以外にも、具体的に祭をコロナ禍から復興させるためにはどのような取り組みをしたらいいかを考察していく必要がある。それに、コロナ禍という困難を逆手に取りコロナ禍後の祭や地域をより良いものにしていくには具体的にどのような方法があるのかも考察していきたい。

### 参考文献

- ・ 谷端 郷, 板谷直子 (牛谷直子), 中谷友樹 平成 30 年 (2018) 年 「被災後の町の復興を支える神輿渡御 一宮城県南三陸町保呂羽神社の春祭り」『歴史都市防災論文集』 第 12 号 立命館大学歴史都市防災研究所
- ・ 清水博之 平成 25 (2013) 年 「無形民俗文化財の伝承と課題―日立風流物の戦後復興を事例として―」『下野民俗』 第 46 号 下野民俗研究会
- ・ 久保田裕道 令和 3 (2021) 年 「コロナ禍における無形の民俗文化財の現状と課題」『無形文化遺産研究報告』 第 15 号 東京文化財研究所

2021後「地域貢献実習Ⅱ」現地演習「堺市」日程表(後)

年月日	曜日	時刻	種別	場所	用途	行動(食・交通機関情報)	費用・料金	特別料金	備考		
12月31日	土	9:30	発		大塚駅				5000		
		↓				JR特急ひたち6号 池田行	2,640	乗 1,580			
		10:35	着	9車線	上野駅		(徒歩)				
		↓									
		10:42	発	2車線	上野駅		JR山手線内回り 高橋・弘川行				
		↓									
		10:59	着	6車線	西横駅 (JR)		(徒歩)				
		↓									
		11:30	発	特急車線	西横駅 (西武)		西武特急ちちぶ3号 西武赤父行	790		乗 710	
		↓									
		12:47	着	1車線	西武赤父駅						
		↓									
		12:50			西武赤父駅 改札口前	集合 (点呼、健康チェック、日程確認ほか)					※ 大学生一人1タグ配布
		↓									
		13:00	着		ホテルルートイン赤父		到着のグループ (一泊前夜) を確認する				
		↓									
		13:10	発		ホテルルートイン赤父		(徒歩)				
		↓									
		13:30	着		上町総合図書館		上町総合図書館と総合電子を見学				
		↓									
		14:00	—		上町総合図書館/上町キヤラリー		堺市の教育委員会・上町支所の歴史の会員と懇談				2期に分ける場合あり
		↓									
		15:15	—		上町総合図書館		上町総合図書館の歴史を学ぶ				
		↓									
		15:40	発		上町総合図書館		(徒歩)				
		↓									
15:55	着		堺文神社		本館、境内社、本町総合館などを見学						
↓											
16:30	発		堺文神社		一泊前夜						
↓											
17:30	着		マチナカ (総合旅行問の館内)		グループで現地調査 (昼食を含む) ※ 本庁舎に休館中あり			調査を促すことを勧めます			
↓											
17:30	着		堺文神社		本館前						
↓											
18:00	発		堺文神社		(御神幸行列の先頭)						
↓											
18:30	着		堺文公園 (観音所)		(御神幸行列とともに参詣)						
↓											
19:00	着		観音所		(御神幸)						
↓											
19:30	着		堺文公園 (観音所)		高橋前 (代伊勢神宮) の見学						
↓											
20:00	発		堺文公園 (観音所)		高橋前火の見						
↓											
20:30	着		堺文神社		(御神幸行列とともに参詣)						
↓											
20:30			堺文神社 (境内)		解散 (点呼、健康チェック、翌日の集合時間と場所の確認ほか)						
↓											
22:00	着		ホテルルートイン赤父		チェックイン			8時前チェックインの際は、遅く到着するの コンビニで朝食を食べておくをお願いします			
夜宿 (旅費別)											
12月31日	土	09:30	発		ホテルルートイン赤父	チェックアウト (旅費別) 6:45~9:00 (混雑)			5000		
↓											
9:15			上町総合図書館		集合 (点呼、健康チェック、日程確認ほか)						
↓											
9:15	着		上町総合図書館		上町総合図書館の歴史を学ぶ						
↓											
9:45	発		上町総合図書館		(徒歩)						
↓											
10:00	着		堺文まつり会館入口 (外観)		3D映像観覧と展示見学 (予約済み)	500					
↓											
10:45	発		堺文まつり会館		(徒歩)						
↓											
11:10	着		西武赤父駅								
↓											
11:10			西武赤父駅 改札口前		解散 (点呼、健康チェック、挨拶ほか)						
↓											
11:24	発	1車線	西武赤父駅		西武赤父特急ちちぶ24号 池田行	790	乗 710				
↓											
12:43	着	特急車線	西横駅 (西武)		(徒歩)						
↓											
12:53	発	7車線	西横駅 (JR)		JR山手線外回り 上野・東京方面						
↓											
13:10	着	3車線	上野駅 (JR)		(徒歩)						
↓											
13:30	発	8車線	上野駅 (JR)		JR特急ときわ63号 池田行	2,640	乗 1,580				
↓											
15:03	着		大塚駅 (JR)								

## 秩父神社例大祭について ～次代へ伝える伝統芸能と技術～

文学部文化交流学科 1年

2114005 石井 優希奈

### [目次]

- 1 序論
- 2 本論
  - (1) 秩父神社 お元氣三猿／北辰の梟／つなぎの龍
  - (2) 秩父夜祭
  - (3) 秩父の笠鉾・屋台 上町屋台／方向転換／屋台や飾りの保存／お囃子
- 3 結論
- 参考文献

キーワード：秩父神社／上町屋台／秩父夜祭／御神幸祭り／伝統の継承

## 1 序論

2021年12月3、4日に地域貢献演習Ⅱの授業において、埼玉県秩父市でフィールドワークを行い、上町屋台や秩父夜祭を見学した。今回の実習を通し、遥か昔から秩父の地に伝えられ、代々地域の人々に継承されてきた伝統芸能を調査していき、秩父ではどのように文化の継承がなされてきたかについて考察していきたいと思う。

## 2 本論

### (1) 秩父神社

秩父神社は紀元前86年に創建され、約2100年以上の歴史を持つ神社である。元の社殿は戦国時代末期の兵火により消失してしまった。現在の社殿は天正20(1592)年に徳川家康から寄進されたものである。社殿の建築様式は権現造りで、社殿に施された色鮮やかで繊細な彫刻が特徴的であり、埼玉県の有形文化財にも指定されている<sup>1</sup>。



秩父神社本殿正面

#### ・お元氣三猿

日光東照宮の三猿が「見ざる・言わざる・聞かざる」であるのに対し、秩父神社の三猿は「よく見て・よく聞いて・よく話す」お元氣三猿として地元の人々に親しまれている。今回の実習では彫刻の保存修繕中であつたため直接彫刻見ることは叶わなかった。

#### ・北辰の梟

北辰の梟は本殿北側の中央に彫られており、体は正面の本殿を向き、頭は真北を向いて昼夜を問わず御祭神を守護している。秩父神社の御祭神である妙見様は、北極星を中心とした北辰北斗の信仰があり、この梟の見ている方角に妙見様が出現するといわれている。また、梟の上に描かれている波や渦巻き模様は火災除けの意味があるようだ。並びに、神社の四隅に見られる狛犬の

ような彫刻は、外部から邪悪なものを神社に入れないようにする役割があるそうだ。

#### ・つなぎの龍

名工左甚五郎が彫刻を施したと伝えられており、鎖でつながれた美しく躍動感のある青龍の彫刻だ。古来より四方は四神が守っていると信じられており、この青龍は秩父神社の表鬼門の方向である東北を守護している。



「北辰の彙」彫刻

筆者撮影(2021年12月3日)



「つなぎの龍」彫刻

#### (2) 秩父夜祭

秩父夜祭は京都祇園祭、飛騨高山祭と共に日本三大曳山祭りの一つに数えられ、毎年12月3日の夜に行われる。この祭りの最中は、互いに相思相愛である武甲山の龍神様(男神)と、秩父神社の妙見様(女神)が、年に一度夜祭の間でのみ逢瀬をすると語り継がれている。

夕方の5時半頃から行われる「御神幸祭」では、神輿1基・御神馬2頭・大真榊等を行列の先頭にし、中近・下郷の2台の笠鉦と、宮地・上町・中町・本町の4台の屋台が神幸行列に続いてお旅所へ向けて出発する。昔の行列は門前の番場通りを通っていたが、昭和52年からはルートを変更し、本町通りを経由してお旅所へ向かうようになったそうだ。神社からご祭神を乗せた神輿を警護する神幸行列の先頭に立ち、道案内を担うのは「猿田彦大神」である。猿田彦大神は天狗のような面をつけ、一本歯の高下駄を履き、御旅所までの長い道中を導く役目を持っている<sup>2</sup>。

御旅所に御神幸行列が到着すると、斎場祭が執り行われる。

この御旅所と秩父神社、神体山の武甲山は一直線に並んでおり、御旅所に山の神が降臨すると信じられていた。斎場祭の神事は幕内で関係者のみで行われるため一般人は見る事が出来ない。斎場を囲む幕は、葬儀をイメージさせる白黒のものが張られている。一見不吉なものに思えるが、この幕は「くじら幕」と呼ばれるもので場を清めるという意味合いがあるようだ。



御神幸行列中の猿田彦大神  
筆者撮影(2021年12月3日)

御旅所と武甲山  
筆者撮影(2021年12月4日)



### (3) 秩父の笠鉾・屋台

御神幸祭の付け祭りとして行われる笠鉾・屋台の曳航は、その豪華絢爛さから「動く陽明門」とも呼ばれている。御旅所の手前には、団子坂と呼ばれる斜度 25 度の上り坂があり、約 200 名の曳き子が協力して 15t を超える笠鉾・屋台を曳き上げる光景は夜祭最大の見せ場でもある。また、団子坂の直前にある踏切を通過するときは、鉄道の電線を切断し、笠鉾や屋台が通れるようにする。

秩父夜祭の屋台は 4 機あり、曳行の途中で屋台を止め、舞台の上で女子が長唄や三味線に合わせて日本舞踊を行う屋台行事が行われる。川瀬祭終了後から約 4 カ月に渡って稽古を行い、夜祭や斎場祭で奉納される。

笠鉾は 2 機あり、秩父まつり会館で展示されている笠鉾は江戸時代のものを復元したものである。高さ 11 m、重さ 10 t の笠鉾は時代とともに徐々に形が変化し、屋台のような屋根が付き、屋根の上には豪華な花笠が取り付けられるようになった。現在は、電線にぶつかるなどの理由から笠鉾から花笠はなくなったようだ。

#### ・上町屋台

大きな四つ棟の屋根が特徴的であり、全体は黒と金で厳かに彩られ、それぞれ極彩色で繊細な彫りがなされている彫刻、屋根や勾欄を飾る丁寧に彫り込まれた金具が非常に美しい。

上町の彫刻は中国神話に由来したものが彫られているようだ。祭りの時、屋台には 20～30 人が乗り、約 16～18t ある山車は、人が乗ると 20 t にもなるという。秩父祭のお囃子は、演奏している姿を観衆に見せる事はなく、周りから見えない場所で演奏をする。舞台の奥にあるふすまの中は、たたみ 3 畳分くらいの広さがあり、小太鼓と大太鼓を 4 人で叩いている。襖の中は最高で 20～25 人が入ることができ、順番を待っている間は「止まり木」という場所で待機する。

屋台下の車輪に挟まっている草は摩擦を避けるために挟まれており、油が出る草が使われ、ネギなどを挟める時もあるらしい。



上町屋台と車に挟まる草  
筆者撮影(2021年12月3日)

#### ・方向転換

笠鉾・屋台は方向を変えるためのハンドルはついておらず、屋台を方向転換する際は「ギリ廻し」と呼ばれる手法が使われている。テコの原理を応用したもので、「ギリ棒」という凸型の台を使用し、後輪を持ち上げる。上町では屋台をジャッキで持ち上げ、方向転換が行われているようだ。屋台が方向転換を開始する際は、大太鼓の音が止まり、周囲には小太鼓の軽やかな音が響き渡る。大太鼓を叩かないという事は、屋台が方向転換を始めることを知らせる合図にもなっている。



ギリ棒

#### ・屋台や飾りの保存

笠鉾・屋台を組み立てる際は 100 名余りが動員され協力し組み立てていく。秩父の屋台は釘などを一切使わない木組みや楔締めによる組み立て式であり、両脇の彫刻板等の部品は木組みに加

え麻縄でも固定されている。屋台の組み立てについての設計図は無く、すべて口伝により継承されている。部品の一部や柱には漢数字で組む番号が書かれている。屋台の解体後に部品を保管するときは、布に一つ一つ丁寧に何重にも包んで保管する。



上町屋台の幕は、牡丹の花と勇ましい獅子の水引幕（約 12 m）、鯉の滝登りの様子が刺繍され、後幕が特徴的だ。

勾欄に取り付けられている部品と番号が書かれている柱  
筆者撮影（2021年12月4日）

水引幕の獅子の顔は約 7 cm あり、顔の中には綿が入っている。後ろ幕は京都の川島織物で昭和 52 年（1977）から作られ、1700 万円ほどの費用がかかったそうだ。後ろ幕の鯉の泳ぐ波模様は金一色ではなく、オレンジ色の糸が編み込まれており、金色の波を彩る細やかな刺繍が施されている。幕を取り扱う際は軍手ではなく滑らかな生地の手袋を使い、幕の劣化を防いでいる。幕はお祭りの前に、年に一度 8 月の末頃に虫干しを行い、祭りに備える。

秩父祭りは国指定重要無形民俗文化財やユネスコ無形文化遺産に登録されており<sup>3</sup>、笠鉾・屋台は国指定の重要有形文化財に指定されている<sup>4</sup>。こういった有形文化財の補助金は文化庁から出されており、国から手厚く保護がなされている。文化財に指定される前は、地元の人々がお金を出し合い屋台の物品を購入していた。現在は大規模な蚕産業による財力は失われてしまったため、国による補助を受けながら伝統芸能を後世へ継承していている。



後幕「鯉の滝登り」と牡丹と唐獅子の水引幕  
筆者撮影（2021年12月4日）



## ・お囃子

秩父夜祭のお囃子は勇ましく軽快な太鼓と篠笛の音が特徴的である。他の地域のお囃子は笛に合わせて太鼓が叩かれるのに対し、秩父の場合は太鼓に合わせて笛が付いていく独特なお囃子だそうだ。お囃子の囃子手は祭りの当日に禊を行ってから祭事に臨む。

上町のお囃子は、大太鼓 1 台、占め太鼓 3 個、篠笛 1 本、摺鉦（すりかね）1 つの合計 6 つから成り立っている。個々の楽器から発せられる音色は独自の意味を持っている。まず大太鼓は波の音、3 つの小太鼓は川のせせらぎ、篠笛は風の音、摺り鉦は千鳥の鳴き声を意味しているそうだ。

2 尺（60 cm）ある大太鼓に使われる太いパチは直径 4 cm、長さ 40 cm もあり、小太鼓のパチよりも約 1.5 cm 長い。大太鼓の演奏は一人につき 2～3 分しか叩くことが出来ないため、叩き手が交代する際は、聞いている人に音の変化を気づかせないように叩いている。太鼓のパチには太鼓を叩きすぎたため血が付着しているものもあり、怪我をしていたとしても演奏を止めない祭りに

かける強い熱意が感じられる。

秩父のお囃子には楽譜はなく、大人が弾いているのを子供の頃から聞き、耳で覚えていく。特に篠笛は、大太鼓のリズムを理解していなければ吹くことが出来ないため、笛吹は必然的に年長者が吹くこととなる。秩父の篠笛のリズムは小太鼓の音に合わせて演奏するため、トリルが連続で続き相当な演奏技術が必要とされる。



お囃子に使用される和楽器  
筆者撮影(2021年12月4日)

### 3 結論

今回のフィールドワークを終え、実際に地元の人と交流することでしか感じられない祭りにかかる熱意や、交流を通して秩父の地には物として残る有形文化財や、地域の人々の間でしか伝承されなかった技術が数多くあることが分かった。特に秩父の伝承形態では、通常途中で失われるリスクがある伝承法が使われており、現代まで消失せず続いて来たことに驚愕した。加えて、秩父夜祭で行われているような素晴らしい伝統芸能は、地域住民だけの努力では限界があり、行政からの支援がなければ次世代へ残していくことが難しいことが分かった。上町の方へのインタビューから、秩父の生活は祭り中心で回っているが、秩父のような大きな祭りであっても後継者不足の問題や、伝統文化をいかに時代のニーズに合わせて伝承していくかが今後の課題となっている。今年もコロナウイルスの影響により全国各地で伝統芸能の行事が中止・縮小が余技無くされ、伝統の継承が厳しくなっているという現状もある<sup>5</sup>。地域で受け継がれてきた伝統が一時期の中止により失われてしまうのは非常に惜しく、伝統文化の保護のためにも一刻も早い対策が必要だ。そのためにも、秩父市のように地域と行政が一体となって伝統継承をサポートし、協力し合っ対策していくことが出来れば、伝統文化を後世へと伝え続ける事が出来るのではないか。また、現代社会のニーズに合わせて、伝統芸能のアピールの仕方も徐々に変えて行き、若者に興味を持って貰うことで新たな担い手としての人材を確保していくことも大切だと筆者は考える。

#### 参考文献

- 1 秩父神社公式サイト 最終閲覧日：12月15日  
(<http://www.chichibu-jinja.or.jp/saijin/>)
- 2 秩父まつり会館展示説明及び公式サイト 最終閲覧日：12月17日  
(<https://www.chichibu-matsuri.jp/yomatsuri/>)
- 3 秩父市公式サイト 最終閲覧日：12月19日  
(<http://city.chichibu.lg.jp/6694.html>)
- 4 国指定文化財等データベース 最終閲覧日：12月19日  
(<https://kunishitei.bunka.go.jp/heritage/detail/301/39>)
- 5 東京文化財研究所 伝統芸能における新型コロナウイルス禍の影響(2021.12.1更新)  
(<https://www.tobunken.go.jp/ich/vscovid19/eikyoku-20211201>) 最終閲覧日：12月19日

## IV 情報発信のコラボレーション — 「情報デザイン演習」

## 情報発信のコラボレーション―「情報デザイン演習」

鈴木 晋介

「情報デザイン演習」（旧カリキュラムの名称は「編集技法」）は冊子やポスターなどの編集デザインと情報発信の実践的な演習である。1年次から4年次まで履修可能で本年度は14名が受講した。担当教員・染谷智幸は主としてデザインやレイアウトの指導、鈴木晋介は演習で使用するAdobeの編集ソフトInDesignの操作指導を行った。またスチューデントアシスタントとして文化交流学科4年の渡邊麻由さんも毎回参加し、操作実演や提出課題の整理、技術指導サポートを行ってくれた。

演習は「特定の操作技術の習得」→「それを活かした課題作品制作」→「作品発表会」というパターンを繰り返しながら、受講者の情報編集能力を少しずつ高めていく形をとっている。本年度取り組んだ課題はつぎの4つである。

- ①子供たち向けのパスポートをつくろう
- ②自分の名刺をつくろう
- ③アクティブ・ラーニング報告書の表紙をつくろう
- ④学科広報誌「ロンゴロンゴ」の記事を作成しよう

本演習のアクティブ・ラーニングたる所以は、これらの課題作品が本演習以外のさまざまな情報発信メディアやイベントと連動していくところにある。本年度の場合、上記課題①と③がそれに該当する。

まず③からふれば、いまお手にとっていただいているこの冊子の表紙を作成したのが本演習の受講者である。教員側からは表紙に記載すべき事項（冊子タイトルや年度等）のみを示し、あとは学生の自由な創造性に委ねる。発表会を経て最優秀作品が実際の冊子の表紙に採用され、製作者の名前も印字されることになる。アクティブ・ラーニング報告書の表紙づくりは今年で3年目になるが、毎年個性的な作品がそろそろ。大学の授業においては、論文やレポート以外で「なにかをつくる」という機会は学生たちにとってそう多くはない。作品づくりは容易ではないが、どこか楽しげな空気がいつも教室には漂う。

①の「パスポート」は、本冊子で宮崎晶子と染谷智幸が記しているところの「多文化協働演習」で使用されたものである。詳細はそちらをご参照いただきたい。ここではつぎのことだけ述べて

おきたい。本演習と別の授業との連携がこれまでにないものだった、ということである。昨年度のアクティブ・ラーニング報告書で筆者は、この学科の情報発信の場の広がり、この演習のフロンティアと重なっているということを書いた（『2020年度アクティブ・ラーニング報告書』、19頁）。その時点では、他の授業との連携はまるで想定していなかった。本演習のつむぐ有機的連携のフロンティアは学内外にまだまだ広がっているようである。

最後に、これまでにこの演習を履修し、学科広報誌「ロンゴロンゴ」の編集部員として活躍している学生たちが今年度新しい作品づくりに挑戦した。学生たちの手による学科広報チラシの作成である。学内外のイベント時に主に高校生に向けて配布している。こうした作品もシリーズ化していければ面白いと思っている。以下、学生たちの作品の一部を紹介することにしたい。

### 〔学科チラシ〕



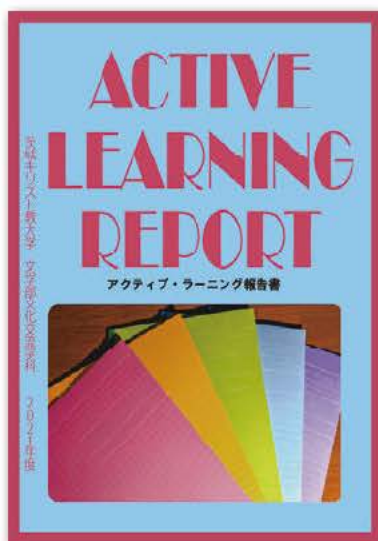
M.Kさん (RongoRongo 編集部)



R.Sさん (RongoRongo 編集部)

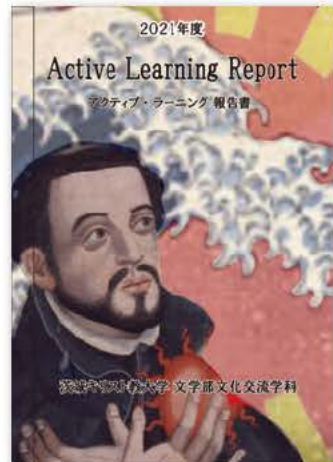
### 〔AL 報告書表紙〕

本年度のアクティブ・ラーニング報告書（本冊子）の表紙に採用された、H.Sさん（1年）の作品です。この作品に使われているノートの写真も制作者の学生が自分で撮影したものを使用している。





M.M さん (3年)



H.K さん (1年)



K.T さん (1年)



S.Y さん (3年)



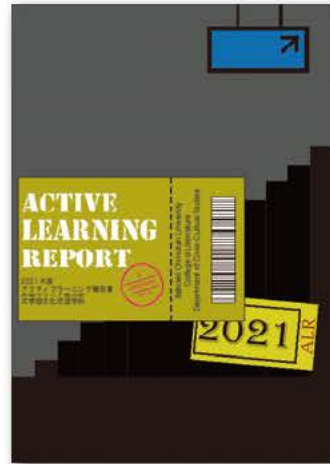
T.N さん (4年)



A.M さん (3年)



C.Nさん (1年)



N.Sさん (2年)



F.Nさん (1年)



S.Kさん (3年)



T.Sさん (3年)



K.Sさん (1年)





## < 学科講演会 >

### SDGs 時代の地域環境を考える

講師 元木理寿 先生

(常磐大学総合政策学部)

## 2021 年度文化交流学科講演会報告

岩間 信之

2021 年度文化交流学科講演会「SDGs 時代の地域環境を考える」

講師 元木理寿 先生（常磐大学総合政策学部）

2021 年 12 月 1 日（水）16：00-17：30 11203 教室

元木先生は、水文学（地球上の水循環を対象とした自然地理学の一つ）を専門とされる、常磐大学の地理学教員である。元木先生は同大学で地元学（地域の魅力を活かす住民協働の街づくり。本学の「ひたち学」に相当）を担当しており、大学生や高校生たちとともに自然環境の保全を実践するアクティブ・ラーニング形式の演習を展開している。同じ地元学でも、伝統文化の保全や社会課題の解決に主眼を置く「ひたち学」とは、地域に対するアプローチが異なる。今後、本学と常磐大学、および茨城大学の連携により、地元学の質を向上させていきたい。

今回は、「SDGs 時代の地域環境を考える」というタイトルで、元木先生にご講演頂いた。この内容は、元木先生が地元学の演習で最初に学生たちに伝えるメッセージとのことである。以下は、講演内容の概略である。

かつて、人類は自然環境（気候、地質、地形など）に完全に依存しながら、自給自足型のつましい生活を送っていた。しかし 18 世紀半ばの産業革命以降、人類の生活様式は一変した。人口や一人当たり消費レベルの急増に伴い、人類は機械化やグローバル化に代表される開放型の社会システムを構築した。先進国に暮らす我々は、豊かで便利な生活を享受している。しかしこの暮らしは、世界中から食料や燃料を大量に収集・消費しなければ成立しない（いわゆる人類の脱生物行動）。この便利な暮らしは、森林伐採や水質汚染、温室効果ガスの排出などの環境破壊の上に成り立っていると言っても過言ではない。

こうしたなか、1980 年代から持続的社會 (Sustainable Society) の重要性が指摘され続けている。持続的社會とは、次世代を危険にさらす事なしに、自らの要求を満たすことが出来る社會を意味する (L.R.Brown, 1990)。再生可能なエネルギーに支えられる社會の構築、使い捨て社會からリサイクル社會への轉換、生物学的基礎の回復などが、持続的社會の例として挙げられる。しかし、これらはいくまで理想論である。實際問題として、水道や電気、インターネットといった生活インフラが存在しない洞窟暮らしに戻りたい現代人は、まずいないだろう。表面上の知識だけでは問題は改善しない。持続的社會の實在モデルがいまだに存在しないことを、私たちは認識する必要がある。

問題は、私たちが知識偏重の社会的風潮のなかで、環境問題の「問題化」された場面だけに目を奪われていることにある。その根っこにある環境そのものとの、行動レベルでのつながりが切断されてしまっている（生活思想と生活実践の相互の深め合いが絶たれている）。これでは、真の意味での地域環境を考えることはできない。

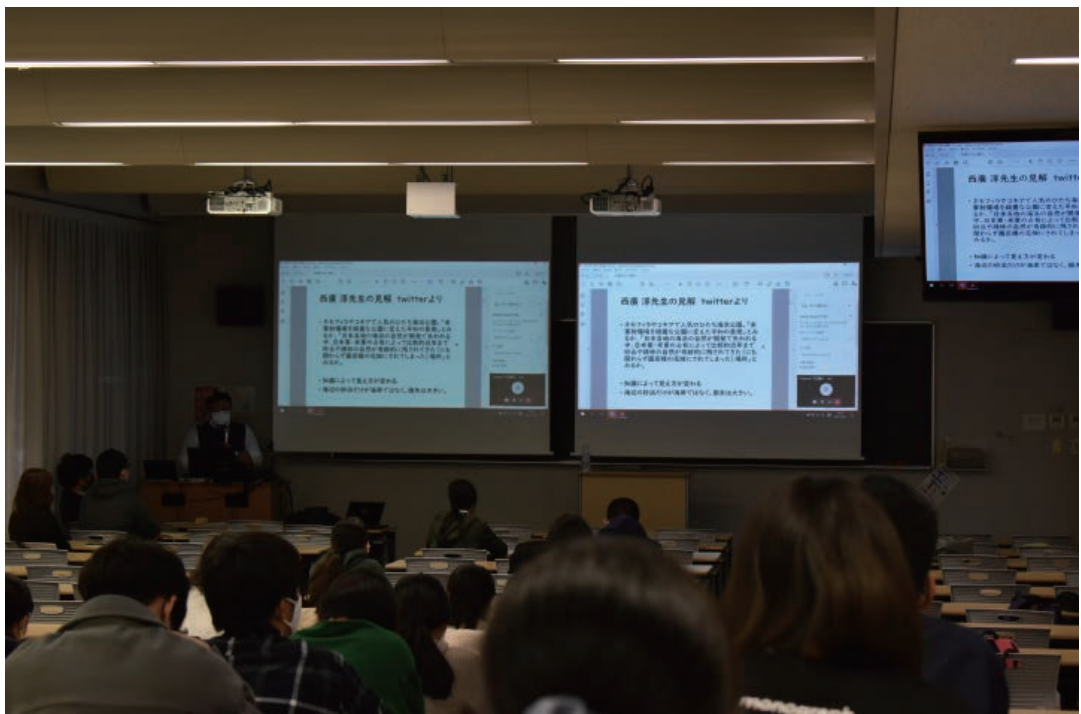
たとえば、水質汚染問題は誰でも知っている。しかし、生活レベルで水と触れ合う経験のある現代人が、はたしてどれくらいいるだろう。みなさんは、シャドウ・ウォーターという言葉を知ったことがあるだろうか？ 我々の先祖は、小川を流れる水や田畑の水など、日常生活レベルで多くの水と触れ合って暮らしてきた。水は、当時の日常生活を直接的に支える大切な資源であった。水を知る人は、水を大切にす。また、水の危険性（洪水や土砂崩れなどの自然災害）も熟知している。しかしいま、都会の水は地下の水道管や水道タンク、下水道管に閉じ込められている。これがシャドウ・ウォーターである。シャドウ・ウォーターが広がるなか、現代に生きる私たちは、水に対する親しみや畏怖の念を忘れつつある。水に対する認知（広い視野でみると自然環境全体の認知）が単純化すると、水（自然環境）は消費され、使い捨てられるものに成り下がってしまう。私たちは今一度、環境を再認識する必要がある。シャドウ・ウォーターのベールを剥ぐには、感性豊かな生活者による、具体的で日常的な実践行動（＝生活思想と生活実践の相互の深め合い）が不可欠である。ここに、地元学の意義がある。

地元学とは、調べ、考え、つくることを繰り返す地域調査である。しかし、生活体験が不足した子どもたち（現代人）には、地域の「なぜだろう」がなかなか見えてこない。地元学の極意は、ないものねだりではなく、あるものを探すことにある。あるものは目に見える。気になったものを写真に撮り、それは何かと地元の人に尋ねてみる。また、驚いたことや気になったことを絵地図にまとめてみる。そして、絵地図を見ながら、「これはどういうことなのか？」を考えてみる。これらを繰り返すことで、それまで見えなかったものが見えるようになるだろう。





講師・元木理寿先生と講演会の様子



# < Faculty Development >

FD 研修会報告

## 2021 年度文化交流学科 FD 報告

文化交流学科主任 染谷 智幸

昨年度の文化交流学科の Faculty Development は、後期の 10 月に「韓国の大学におけるオンライン・ICT の対応と、韓瑞大学校の現状と課題」と題した講演を、本学の交流校である韓瑞大学校准教授であるイ・サンフン氏（通訳：韓瑞大学校金泰ド教授）にお願いし、デジタル先進国である韓国の大学教育の状況を踏まえて、本学や学科のオンライン状況を客観的に捉え直す契機としました。

今年度は、留学生を多く迎えることを目標とする C 科にとって、何を見据えるべきなのかを、教員自身が深く学ぶ場にしたいと考えました。そこで、ベトナムから来日した外国人労働者（とくに技能実習生）が、どのような状況に置かれているのかを、実話を元に再構成した映画を鑑賞することにしました。周知のように、本学にはベトナムをはじめ、東南アジアからの留学生も多く、ベトナムからの労働者状況の把握は、留学生の背景を知る上でも重要と考えております。

その映画とは、2021 年度、新藤兼人賞の金賞を受賞した『海辺の彼女たち』（藤元明緒監督）です。この映画の上映は、2022 年 2 月現在も進行中ですが、自主上映という形が可能になっており、この自主上映を主幹する NPO 法人 日本・ミャンマーメディア文化協会から DVD を送っていただき上映いたしました。

上映期日：2022 年 1 月 25 日（火）午後 2 時 25 分～3 時 55 分

場所：11 号館 11301 教室

参加者：文化交流学科教員 12 名

当初は学生にも参加を募りましたが、新型コロナのオミクロン株の流行により、教員だけの視聴となりました。

視聴後、多くの先生方から優れた映画だった、学生にも視聴させたかったとの感想が寄せられました。私も優れた映画作品だと思いました。その感じ入った点を二つほど述べてみます。

一つは、技能実習生たちの日本での環境や、その実習生たちが不法労働に走るというのは、テレビなどのニュースで「事件」としては、よく知っているわけですが、その「事件」の背後には実習生たちの人生や家族や恋愛があるということです。「事件」として見れば、実習生を「可哀そうだ」「でも不法労働はよくない」など紋切り型の対峙しか出来なくなります。しかし、この映画では実習生たちの人生を深くえぐって、一人一人に違う人生があることを浮き彫りにしてくれました。私たち教員が留学生に対峙するとき、やはり出身国のイメージが先行して一人一人の違いを見落とすことがあります。それを改めて教えられたように思いました。

二つ目は、この映画を作成する監督やスタッフが、実習生たちの実情を細かくリサーチしていることです。それがよく分かるのは、この映画のパンフレットです。

普通、映画のパンフレットと言えば、監督さんの話や俳優さんたちの写真と実績・演じての感想、周囲の評判などが主ですが、このパンフレットにもそれはありますが、パンフを開いた最初のページには、本作の「背景をより深く把握するために」として、技能実習生制度の実態を数字等を挙げて解説してあります。また、その次のページは「実録」として失踪した実習生のケースを二つ上げて、その二人の言葉が通訳を通して書かれています。

映画を視聴した後で、このパンフを読むと、改めて映画のシーンを思い出すとともに、再度映画を視聴してみたくくなります。つまりこの映画は、視聴者に単に一時の感情を引き起こすことなく、深く真摯にこの問題を考えてもらうことを願っているのだと思います。

次年度の授業でも、この映画を視聴することを学生に薦めてみたいと思います。

この映画を制作された監督さんやスタッフの皆さんに心より感謝を申し上げます。(了)

〈参考〉

<https://umikano.com/> 『海辺の彼女たち』公式サイト

～予告編の動画などを見ることができます。

<https://exnkk.stores.jp/> 『海辺の彼女たち』パンフレット制作のサイト

～パンフレットの内容説明や購入方法等があります。



『アクティブ・ラーニング報告書』は、茨城キリスト教大学文学部文化交流学科の出版物です。  
*Active Learning Report* is published by Department of Cross- Cultural Studies, College of Literature,  
Ibaraki Christian University.

2021 年度 文化交流学科  
アクティブ・ラーニング報告書

2022 年 2 月 28 日発行

©2022, Department of Cross-Cultural Studies, College of Literature, Ibaraki Christian University

発行 茨城キリスト教大学文学部文化交流学科  
〒319-1295 茨城県日立市大みか町 6-11-1  
電話 0294-52-3215 (代表)

編集 鈴木 晋介  
編集協力 渡邊 麻由 RONGORONGO 編集部  
表紙デザイン 佐川 仁美

---

2021

**Department of Cross-Cultural Studies**